

小さな光

マーサ・メンセンディーク

奨励者紹介 [マーサ・メンセンディーク]

同志社大学社会学部准教授

[研究テーマ] 多文化社会福祉・国際社会福祉

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

(ヨハネによる福音書 1章1―5節)

クリスマスまであと5日となりました。子どもの頃、お正月を待ち望む歌を歌ったことを思い出しますが、私はお正月よりはクリスマスまでのカウントダウンが注目される家庭で育ちました。クリスマスのはじめほど前の期間を英語ではアドベントと言います。イエス・キリストの降誕を待ち望む期間としてクリスマスまでの4週間を特別な時期として守ります。

アドベントは「到来」を意味するラテン語の「アドベントゥス」からきたもので、「キリストの到来」、降誕を意味します。教会ではアドベントキャンドルといって、毎週一つの蠟燭に火を灯して、最後の5本目の蠟燭はクリスマス当日に灯します。

同志社のクリスマスツリーも、アドベントの期間中に灯されていて、心が温まり、そしてときめく気持ちにさせてくれます。

教会のキャンドル、クリスマスツリー、そして街にはきらびやかなライトアップでこのクリスマスシーズンは光輝く季節でもあります。

聖書でイエスの誕生を描いている箇所、イエスが生まれた夜に星が輝いていて、その星を頼りに占星術の学者たちはイエスが生まれた場所にたどり着いてイエスを拝んだ、と記されています。

「言」、「暗闇」、そして「光」

さて本日の聖書の箇所も「光」という言葉があります。1節から5節の短い箇所について理解しようとした時に、「言」、そして「暗闇」、と「光」の意味を少し紐解くことで理解が深まると思います。

最初の「言」ですが、日本語訳の聖書では普通の2文字の言葉ではなく、漢字は一文字で、「ことば」です。ギリシャ語の Logos は理性という意味です。

「初めに言があった」。

これは旧約聖書の創世記につながり、神が天地創造した時から「言」はあった、ということになります。神が、混沌とした世界に秩序をもたらした、という意味です。

次に「暗闇」についてですが、天地創造で神は、混沌とした暗闇に「光あれ」と言って光を闇から分け、秩序を作ったと創世記に記されています。また、暗闇は神の創造からの墮落という象徴的な意味もありま

す。

そして「光」ですが、ここでは 象徴的な意味で「正しい生き方」であり、イエス・キリスト、そして命を意味します。イエス・キリストは人間を命へ導くために照らす光であり、神の言が受肉した存在とも理解されます。

「言は神と共にあった。言は神であった」と書かれていますが、イエス・キリストの誕生は神の意志であり、人間に命を与えた出来事だった、ということです。そして、神を知るにはイエスを知るということになります。

今日は特に4節と5節に注目したいと思います。

「命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」。

ここでは、「命」と「光」とはイエス・キリストを意味していると理解することもできます。

暗闇の中のクリスマス

イエスが生まれた時代と環境は決して平和ではなく、ヘロデ王による幼児の虐殺を逃れるために、イエスが生まれたベツレヘムからマリアとヨセフはイエスを連れてエジプトに避難します。

今年のクリスマスも、危険な状況にあるベツレヘムのキリスト教会では、イエスが生まれた時代と重ねてクリスマスを迎えようとしています。

世界は今現在、今日の聖書の箇所がいう「暗闇」の中にいると思います。特に10月からガザ地区で起きている紛争の実態を知ると心が引き裂かれる毎日です。学校や病院、避難所までも攻撃を受け、多くの民間人、特に子どもの命が犠牲になっている人道危機は、まさに人間が暗闇の真っ只中において迎えるクリスマスです。

そういう中、私たちはどういうふうにクリスマスを祝うことができるのでしょうか。こういう時だからこそ、真のクリスマスの意味が救いになるのだと思います。暗い世の中だからこそ、イエス・キリストの誕生がもたらした、光に目を向けることが希望だと信じます。

それでは私たちは今の暗い現実に対して何ができるのでしょうか。光を輝かす2つの方法を紹介したいと思います。

祈ることを通して

一つは、「クエーカー」という、キリスト教の一つの宗派の伝統からです。

クエーカーは平和主義や、平等主義などで知られています。歴史的にはアメリカの奴隷制度にクエーカーは反対し、奴隷制があった南部から自由を求めて、奴隷制が廃止になっていた北部に命からがら逃走する黒人をクエーカーの人たちは助けたのです。自分の家を隠れ家にして避難させるなど、黒人の自由への道のりを助けたことで知られています。南部から脱走した黒人たちは夜中に逃げ出し、日が昇る頃には事前に情報を得ていたクエーカーの自宅で隠れ、また夜になるとその先の拠点、つまり次のクエーカーの家まで移動する、という繰り返しでやっと北に辿り着いた黒人たちの歴史は有名です。

実は私の母校アールム大学はクエーカーの大学で、黒人の逃走を助ける拠点の一つとして知られています。アールム大学は1847年、南北戦争前に創設されました。アールム大学はその時代から平和主義

を柱としていますし、歴史を通してアメリカの軍事力、戦争に反対する学生や教職員が多く、平和学専攻といった学問に力を入れています。社会課題に取り組むことで、より良い社会を作っていく担い手を育てることを使命としている大学です。

クエーカーの礼拝も特徴的です。クエーカーでは日曜礼拝と呼ばず、集会と言いますが、多くの教会の礼拝のように儀式や牧師による説教も讃美歌もなく、沈黙の中で各自の祈りや瞑想の時間として持たれることが多いです。そして沈黙の中で持たれる集会ですが、何か共有したい想いや祈りなどがあれば、誰でも自由に発言できるような時間です。

クエーカーの人たちは、「光」という言葉をよく使います。人間は平等に神から与えられた「光」をもっていて、その光を照らすことで生きていく。光を照らすことの妨げになっていることがあれば、みんなでその壁を取り除くこと、それが共同体の役割であること。そのためには神の導きに心を開き、祈ることが大切としています。

例えば、病気になった知り合いのために祈る時、クエーカーはその人を「光に包む」、という言い方をします。英語では「Holding in the light」と言いますが、日本語では「その人を光のうちに抱きしめる」と訳すことができるかと思います。これは、クエーカーの伝統から取り入れられた共同祈願の一形式です。その人を心にとめる、という言い方もあるかと思いますが、その人を心に描きながら祈るというイメージです。祈りの対象としている人や人たちを光に当てることというのは、その人のことを忘れないという姿勢を示すこと、そして神様にその人と共にいてください、という祈りです。

このような共同体の祈りは、私たちの身近な生活の中でも大切であると同時に、今のような暗い世の中には必要であると考えます。平和を祈ることというのは、祈りを通して憎しみが愛に変わることを願うことであり、その愛の姿勢を確認する方法だと思っています。

もちろん、祈ることは行動に移すことの力にもなります。先程紹介した昔のクエーカー教徒が黒人のための隠れ家を提供したという実践は、祈りによって支えられ神から力を得られた行動だと思っています。

歌うことを通して

暗闇の中にいる今年のクリスマスに何ができるか。という2つ目に注目したいのは歌です。暗い気持ちを明るくする歌はたくさんありますが、今日はその一つを紹介します。

みなさん、この歌を聞いたことがありますでしょうか。

This little light of mine, I'm going to let it shine.

Everywhere I go, I'm going to let it shine.

つまり、

「私のこの小さな光を、私は輝かせる。どこに行っても、私はそれを輝かせるつもりだ」。

と訳すことができます。

1920年代に作詞されたこの曲は、アフリカン・アメリカンのスピリチュアル(ゴスペル曲)として最も広く認識されています。長い年月の間に公民権運動で採用された抵抗の歌へと変化していきました。このような喜びと希望に満ちた歌詞で、「This Little Light of Mine」は社会運動に団結と力をもたらし、抑圧されたグループが共通のアイデンティティを強化し、平等への要求を伝えることを可能にした、と言

われています。

公民権運動のリーダーだった Zilphia Horton や Fannie Lou Hamer が拘束されている時、「This Little Light of Mine」を歌い始めたことがきっかけに、この歌は後に、公民権運動の指導者たちが平和的な抗議デモで行進する際に歌われるようになり、自由と正義のために自分たちの光を輝かせ、それによってすべての人々のために変化をもたらそうという意志を示す歌となりました。

そしてこの歌は子ども讃美歌としても親しまれています。私も子どもの頃に教会で歌い、馴染みのある曲です。

この曲の意味をマタイによる福音書5章 14—16 節に結びつける説もあります。その箇所をお読みします。

「あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」。

子どもたちには一人ひとりが持っている賜物、特技、性格、個性などを隠すことなく、輝かすことは神様が望んでいることで、その光は周りを、あるいは世界を照らす光になる、というメッセージの歌だと思います。この歌の普及は、世界をより良い場所にしていきましょうという世界的な切望を反映していると思います。

今年のクリスマス、世界のあちこちで見る暗い現実に対して、私たちに何ができるか。今日は2つの実践、あるいは、ヒントを紹介しました。危険と絶望の中にいる人や人たちを「光のうちに抱きしめて祈ること」、そして、それぞれがもっている光を輝かせること。この二つは私たちが暗闇の中にいる人との連帯の表現ですが、それぞれの身近な生活の中でも、光を輝かすことは、希望と愛につながると確信します。

みなさま、どうぞ良いクリスマスをお迎えください。

Merry Christmas!

最後に、英語と日本語で簡単な祈りを捧げます。

Lord God, This Christmas, we turn our eyes to you. May we stand firm in our faith, and choose love where others choose hate.

主なる神よ、このクリスマスに、私たちはあなたに目を向けます。私たちが信仰に堅く立ち、他者が憎しみを選ぶ中で愛を選ぶことができますように。

2023年 12 月 20 日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録